

写真の意味形成における撮影者・鑑賞者のイメージの関わり

江本紫織 (九州大学)

写真は現実と結びつき、過去の事象を指し示す点で他の表現と区別されてきた。ロラン・バルトが写真のノエマを「それはかつてあった」と規定した様に、被写体は必ず過去のある時点に存在し、鑑賞者は写真を見ることでそこに写る過去を思い起こすことができる。確かに写真は撮影者等、撮影現場や被写体を知る者にとっては確実に過去のある時点を指し示すものとなり得る。しかし、このような議論においては、写し出された対象との接点を持たない鑑賞者にとって、写真の作用が過去の指示に留まらない点を十分に説明できないと思われる。そこで本発表では被写体が鑑賞者にとって未知のものである場合を考慮しつつ、写真の意味はどのように形成され、如何に機能するかについて考察したいと思う。

このことを考えるにあたり、まず撮影者と鑑賞者の持つイメージの違いに注目し、それぞれの形成プロセスを分析した上で、それらが写真や現実に関与する仕方を見ていくことにしたい。撮影者は自身が目にした現実から何らかのイメージを持ち、撮影し、写真という結果を提示する。この時写真は撮影者にとって現実との結びつきを持つものである。一方鑑賞者は、提示された写真から像に対するイメージを抱き、それを写真の見方に反映させる。鑑賞者のイメージは作者の意図を辿ろうと志向することで作者のイメージに接近していく可能性はあるが、現実との結びつきが無いという差もあるため、2つのイメージは完全に同じには成り得ない。

また、絵画と比較した際、写真の独自性は作者が現実から受けたイメージによって写真と現実とを直接的に結びつけることができる点にあり、写真は完全なる想像の産物にはなり得ない。そのため鑑賞者にも写真を介した現実との間接的なつながりがあり、このことがイメージ形成後の写真の解釈に影響を与えると考えられる。例えば、現実と作者の意図のどちらに比重を置くかによって、鑑賞者は写真のある時は報道写真として、ある時は芸術写真として解釈するということが起こり得る。この様に撮影者と鑑賞者の異なる2つのイメージは写真の意味形成の場にも関与する可能性を持つ。鑑賞者は単に自身の文脈においてのみ写真を解釈するのではなく、背景としてある作者の対峙する現実とのつながりを無意識的に、あるいは意識的に考慮することで写真の意味を見出す。写真の意味は鑑賞者や撮影者の一方が形成するのでも、写真それ自体が内包するものでもなく、撮影者と鑑賞者の意図、解釈の関わりの中で生じると言える。

以上の様に、撮影者と鑑賞者は異なる形成プロセスや現実との結びつきを持ったイメージを介して写真に接している。それぞれのイメージは、固定したものではなく変形可能性を有するため、2つの異なるイメージの接合部分である意味の場は様々な要素によって変容し更新されていくと考えられる。